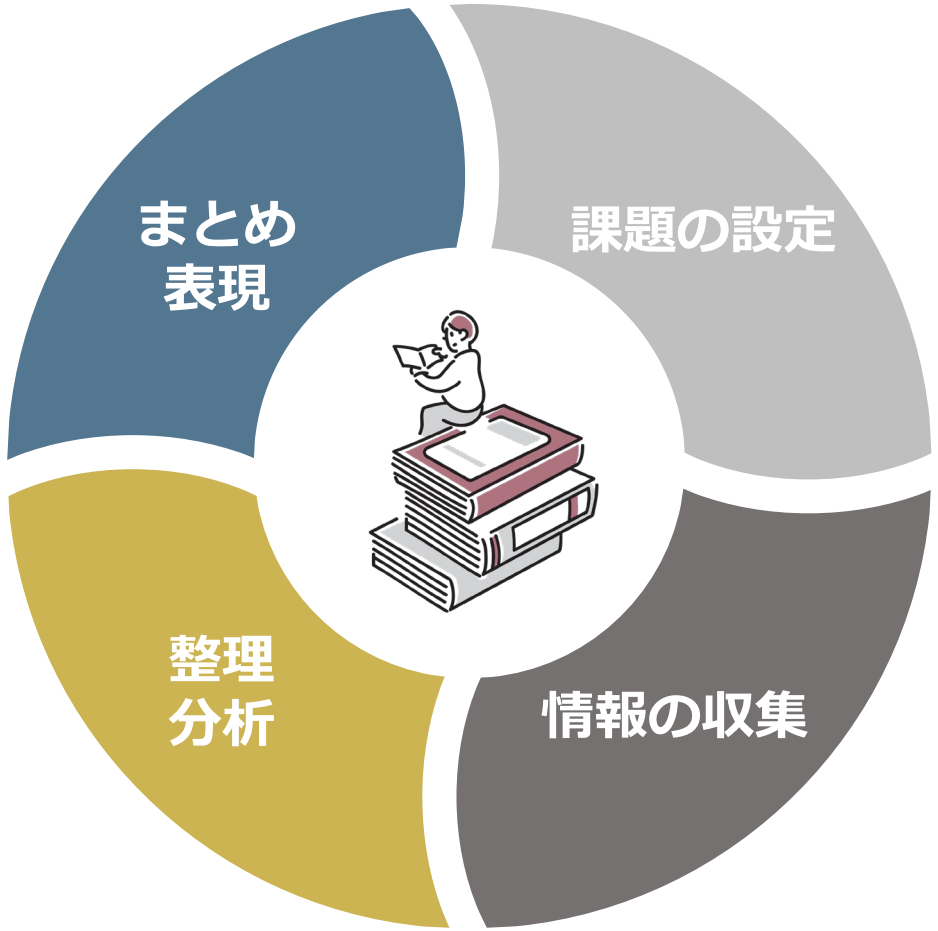
夏目漱石『こころ』探究型学習

對馬光揮（市立札幌藻岩高等学校）



学習指導要領における「探究」

◆そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始める

◆物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営み

プラグマティズムにおける「探究」

◆行為し、失敗し、世界に自ら積極的に介入していくなかで、永遠に新しい発見を見つけようとする営み

對馬が考える「探究」

1. 生徒の内側から湧き出てくる欲求を基盤とした学び
2. 自分の個性・強みを活かせる学び
3. 複数のものの見方を連携させる学び
4. 日常に波及する学び
5. 他者と関わることによって自己を見つめる学び
6. 多様な見方や考え方があることを想定して考え続ける学び

学習材	対象
夏目漱石『こころ』	高校2年生

目標

1	・言葉には、想像や心情を豊かにする働きがあることを理解できるようにする。〔知識及び技能〕（１）ア
2	・作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉えるとともに、作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、作品の解釈を深めることができるようにする。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ（１）オ
3	・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言語を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

高等学校学習指導要領国語編　文学国語

共通必履修科目により育成された資質・能力を基盤とし、主として「思考力,判断力,表現力等」の感性・情緒の側面の力を育成する科目として、深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

仮説

文学作品を読み、グループで探究テーマを設定して考察・発表した後、個人でその成果をレポートにまとめることによって、次の能力を育成することができる。

1. 他者と協働して課題を解決する力
2. 情報を再構成して自分の考えを深める力
3. 収集した情報が妥当なものであるか吟味する力
4. 自分の考えを効果的に表現する力

1 人物像把握（個人）

2 疑問点整理（個人）

3 探究テーマ設定（グループ）

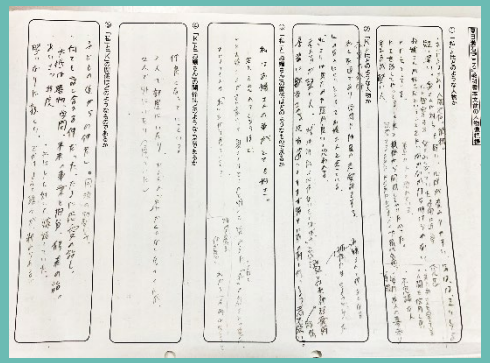
4 情報収集・考察（グループ）

5 発表（グループ）

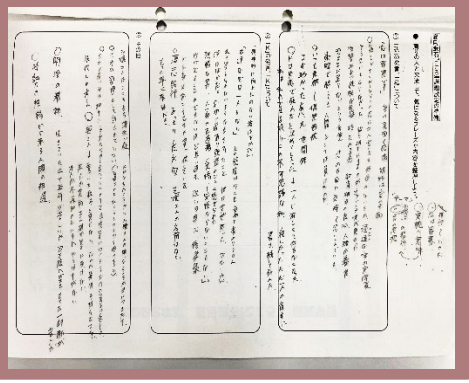
6 個人レポート作成（個人）

6.グループ発表までの歩み

①配布プリント読み取り／人物像把握



②教科書読み取り／疑問点整理

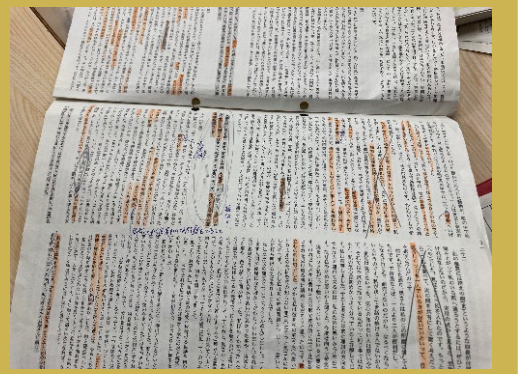


③探究テーマ設定

教科書に掲載されている〔部屋の平面図〕に着目し、「『こころ』における襖の役割」という探究テーマを設定した班

④情報収集・考察

ciniiの使い方を説明し、スマートフォンで論文を読む班



「考察する際は、情報収集に力を入れつつも、テキストから離れないようにすること」と伝え続けました。

7.探究テーマ一覧

生徒がグループで設定した探究テーマ	
①	Kの「尊い過去」とは
②	物語から浮かぶ「明治の精神」について
③	Kはなぜ結婚の話を聞いてから「２日後」に自殺したのか
④	「人間らしさ」という言葉に隠された意味
⑤	Kと私の自殺の真相とは
⑥	「もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」とわざわざ書き添えた理由とは
⑦	Kと夏目漱石とのつながり
⑧	『こころ』での襖の役割
⑨	乃木大将・K・先生の死について
⑩	Kはいつから死にたいと思ったのか
⑪	『こころ』の中で起こった出来事は、部屋割りとどう関連しているのか
⑫	Kの自殺に関する考察～連鎖的な精神的ダメージ～
⑬	Kが自殺する前に書いた手紙にお嬢さんの名前を出さない理由

8.グループ発表

発表の様子

発表のねらい

1	・個人レポートに向けて、話し手は教員とのやり取りから思考を整理・深化するきっかけを得る。
2	・個人レポートに向けて、聞き手は他のチームの発表を聞くことによって新たな発見を得る。

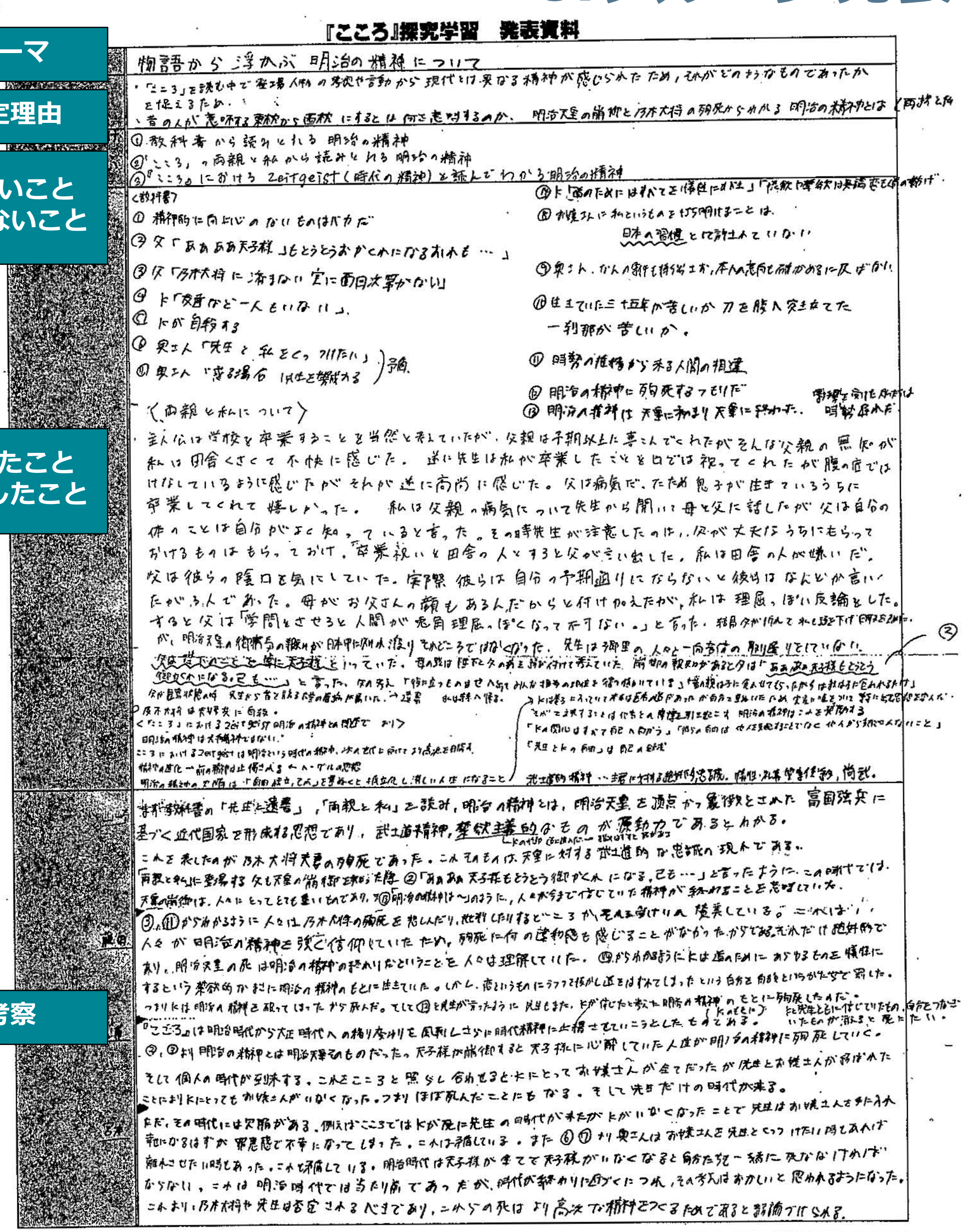
テーマ

設定理由

調べなければいけないこと
整理しなければいけないこと

調べたこと
整理したこと

考察


『こころ』探究学習　発表資料

物語から浮かぶ明治の精神について

〔對馬先生の感想〕

◎情報収集の質が非常に高い。
◎多角的な視点から探究テーマを捉え、考察している点がgood。

〔對馬先生の疑問〕

・明治の精神とは、明治天皇を頂点かつ象徴とされた富国強兵に基づく近代国家を形成する思想であり、武士道精神、禁欲主義的なものが原動力である。
・これを表したのが乃木大将の殉死であった。
・Kは道のためにあらゆるものを犠牲にするという禁欲的なまさに明治の精神のもとに生きていた。
・先生もまた、Kが信じただろう明治の精神のもとに殉死したのだ。

9.グループ発表に対する對馬からの個別の講評

明治の精神

父・乃木大将 ≠ K・先生

（従来の封建的価値観）　（個性や自由）

引き換えに
「孤独」や「独善」が生じる

欠陥　**矛盾**

克服 ⬇

新たな時代への進化・止揚

次の時代に向けて、欠陥と矛盾を抱えた「明治の精神」は葬られなければならない
☞明治の精神に殉死

10.個人レポートと振り返り

発表後は個人レポートの作成へ

夏目漱石『こころ』　個人レポート

ID		氏名	

本文

『こころ』という題名には夏目漱石のどのような思いが込められているのか

○テーマについて
『こころ』の作者である夏目漱石は、『こころ』の予告文において、「今度は短篇を幾つか書いてみたひと思ひます。その一つには、違つた名をつけて行く積ですが、予告の必要上、全体の題が御入用かとも存じます故、それを『心』と致しておきます」と述べている。この文章を読んで、漱石はなぜ『こころ』という題名を付けたのだろうかという疑問を持った。「心」という言葉の『岩波国語辞典第五版』での定義は、「①体に対し(しかも体の中に宿るものとしての)知能・感情・意志などの精神的な働きのもとになると見られているもの。また、その働き。②事物の内にこもっていて、それの価値のもとになるようなもの。」である。どちらも「もとになるもの」とあり、「心」とは体や事物を支配してその価値を形作っているものであることが分かる。形作る事物に制限はなく、広義にとることのできる言葉である。夏目漱石が『こころ』という題名に込めた思いとは何なのか、いくつかの視点から意味を考え考察する。

○「自己本位」における『こころ』
夏目漱石は、文豪であったと同時に、思想家でもあった。『こころ』が書かれた時代は、文明開化の真っただ中であり、日本に西洋の文化が浸透し始めていた。そんな中、夏目漱石は、自己を見失い他者に迎合する日本人の生き方に違和感を覚え、「自己本位に根ざす個人主義」を主張した。「自己本位に根ざす個人主義」とは、『『信念』や『個性』に従う主体的な考え方である『自己本位』をお互いに認め、尊重し合う生き方」のことである。『こころ』が書かれたのと同時期に、夏目漱石は『私の個人主義』と呼ばれる講演を行っている。
そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしているようではなはだ心元ない事だから、そう西洋ぶらないでも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出して見たら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思って、著書その他の手段によって、それを成就するのを私の生涯の事業としようと考えたのです。
この文章から、夏目漱石は『こころ』を通して、他に従属する生き方をしていたその時代の人々に、他に従属する必要はないこと、「個性」を持つことの大切さを伝えるために「自己本位に根づいた個人主義」の考え方を『こころ』という作品に込めたと考察する。「自己本位」の視点から見たタイトルの『こころ』とは、それぞれが違った「心」を持つという意味で、「個性」のことであると考える。『こころ』という題名に「個性」の意味を込めることで、自己本位について『こころ』に著していることを暗示している。

○「個人主義」における『こころ』
夏目漱石は『こころ』自序において、「当時の予告には数種の短篇を合してそれに『心』という標題を冠らせる積だと読者に絶つたのであるが、その短篇の第一に当る『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、予想通り早く片が付かない事を発見したので、とう〳〵その一篇丈を単行本に纏めて公けにする方針に模様がへをした。」と述べていることから、『こころ』という題名に込められた思いは『先生と遺書』から読み取ることができる。『先生と遺書』の中で先生は、「私はたKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。（中略）私は何とかして、私と此裏族との間に成り立つた新しい関係を、Kに知らせなければならない位置に立ちました。然し倫理的に弱点を持つてゐると、自分で自分を認めてゐる私には、それがまた至難の事のやうに感ぜられたのです。私は仕方がないから、臭さんに頼んでKに改めてさう云つて貰はうかと考へました。無論私のゐない時にです。」と記しており、Kの気持ちを考えず、自分勝手な行動ばかりしていたことが分かる。夏目漱石は個人主義として生きるために、「エゴイズムを越えた高い倫理性」を自分に課した。自己本位的な生き方を目指すと、どこかで必ずエゴイズムに陥ってしまう。したがってエゴイズムに陥らないために、利他性も持ち合わせている必要があるということだ。先生はKの自己本位を尊重することができず、エゴイズムに陥った。そんな先生が個人主義として生きるために必要であったものはこの利他性である。人間としての心、「エゴイズムを越えた高い倫理性」を持つということから、「心」を持つということは「利他性」を得るということであると考える。このことから、「個人主義」の視点から見た『こころ』という題名に込められた意味とは、「利他性」である。
『こころ』本文の、「其時の私はたとひKを騙し討ちにしても構はない位に思つてゐたのです。然し私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、御前は卑怯だと一言私語いて呉れるものがあつたなら、私は其瞬間に、はつと我に立ち帰つたかも知れません。」という文章から分かるように、先生自身も自分には利他性が足りていないと分かっていた。しかしそこで先生は、その利他性を持ちKの自己本位を尊重しようとすることをせず、お嬢さんを得るという自分の利益を優先させてしまった。利他性を得ることができないとKの自殺のようなことが起きると身をもって体感した先生は、教え子である大学生の私への教えとして、利他性を得るということを示したのだと考える。そしてそれと同時に夏目漱石から読者へも、利他性を得ることの大切さを伝えているのだと考える。

○先生にとっての『こころ』
『先生と遺書』での先生は、「其極あなたは私の過去を絵巻物のやうに、あなたの前に展開して呉れと逼つた。私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです。（中略）私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴びせかけやうとしてゐるのです。」と記した。先生にとって心臓を破って血を浴びせるという行為はつまり「告白」である。「心」は英語で「heart」つまり「心臓」と捉えることも出来る。心臓は、人体が動作する上で重要部であり、核である。先生は、「過去」という自分にとっての核を、「心臓を破り血を浴びせる」と表現し、大学生の私へ告白する。つまり先生から大学生の私への過去の「告白」、という意味で『こころ』と名付けられているとも解釈できる。

○結論
これらの三つの視点から、『こころ』には、先生の後悔を先生自身に遺書として「告白」させることで、「個性を持ち、お互いの個性を尊重する利他性を得る」つまり自分に人間としての価値を与えるもととなるものである『こころ』を得るべきだという思いが込められているのだと結論付ける。

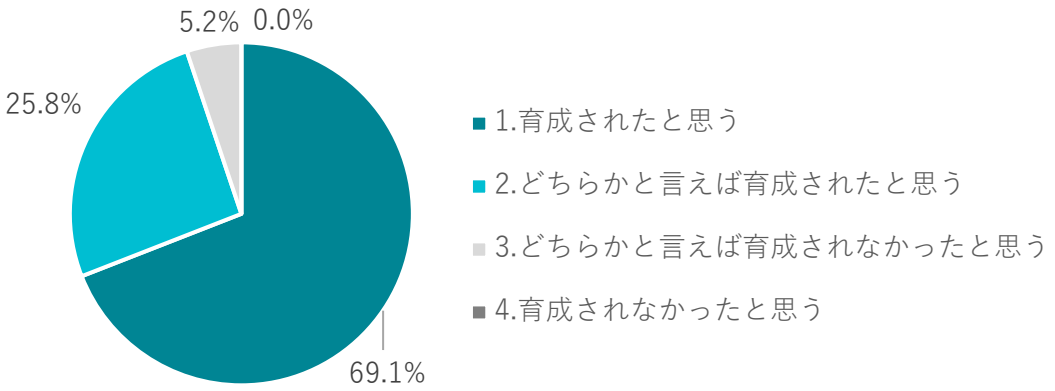
(参考・引用文献)
夏目漱石『漱石』(株式会社岩波書店2014年11月26日第1刷発行)序、234、389～391、411、412ページ
夏目漱石『漱石全集第十六巻』(株式会社岩波書店1995年4月19日発行)584ページ
夏目漱石『21世紀の日本人へ　夏目漱石』(株式会社晶文1998年12月25日初版)82ページ
『岩波国語辞典第五版』(株式会社岩波書店1994年11月10日第5版第1刷発行)396ページ
『テオーリア最新倫理資料集新版三訂』(株式会社第一学習社2021年1月10日改訂8版発行)144、145ページ

生徒の振り返り

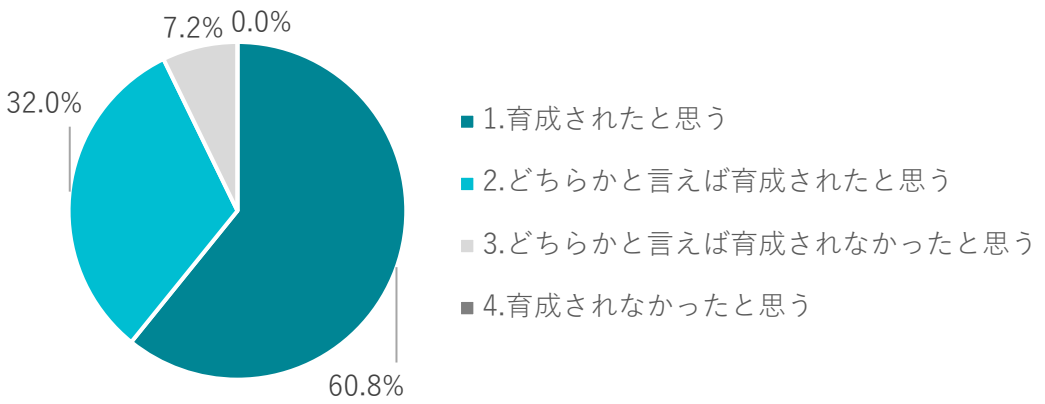
今回の活動では、情報収集力や考察力、文章力はもちろん、思考を飛躍させつつ落ち着く結論に連結させる力が身につくと思いました。ただ本文とにらめっこしていても考察には限界があるので、何か引っかかるワードや著者の情報から探り、深めていったことで良いレポートが作れたと思います。また、どんどん新しい領域が広がっていく感覚を楽しむこともできました。考察の軸がしっかりしていれば、より多角的な視点から情報を集められることにも繋がると思いました。他の人の発表を聞いたりレポートを読んで、集めた情報を提示する順番や、いくつもの小さな考察同士の絡め方が上手だと、読みやすく充実した内容のレポートになるなと感じました。自分は考察が足りていなかった(先生からご指摘いただいたとおり勘違いしていた)部分があったのが反省です。たくさんの気付きがあったので、次に生かしてもっと良いレポート作りに励みたいと思います。

11.仮説をもとにした振り返り

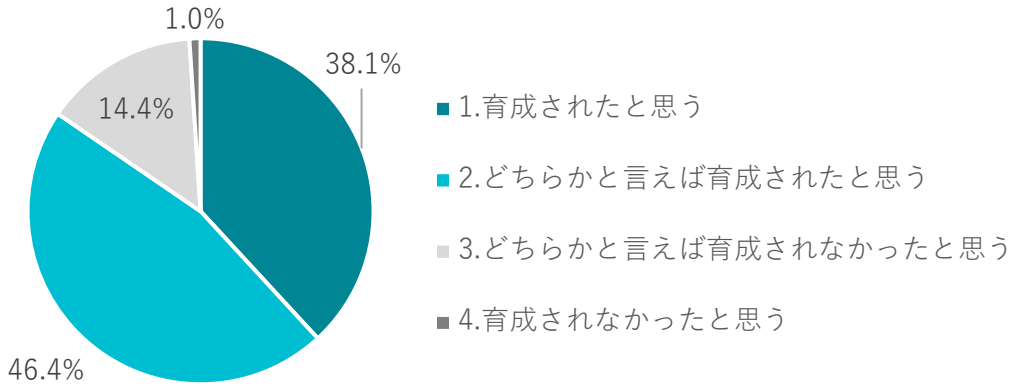
1 他者と協働して課題を解決する力



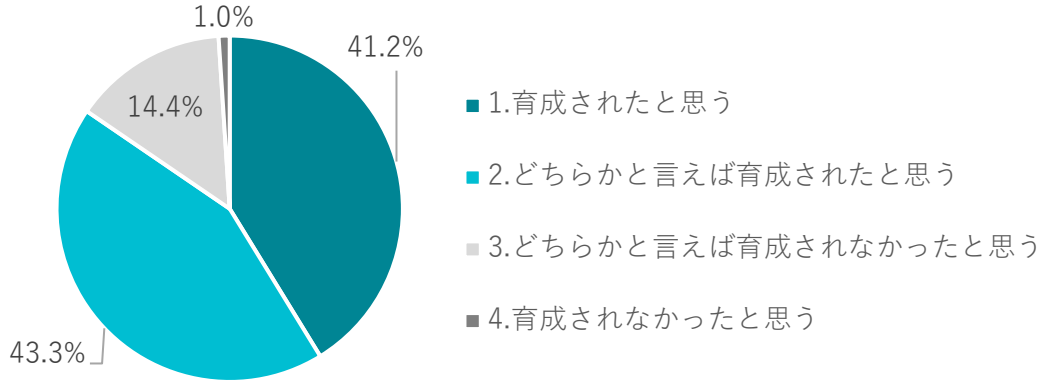
2 情報を再構成して自分の考えを深める力



3 収集した情報が妥当なものであるか吟味する力



4 自分の考えを効果的に表現する力



11.仮説をもとにした振り返り

3,4を回答した生徒の理由（抜粋）

1.他者と協働して課題を解決する力

最初は計画を立てて誰が何を調べるかなど分担できたのだが、そこからの授業であまり来ない人がいたり、私語が多くて自分の役割（調べること）などを他人任せにしたりする人がいて、結局二人でレポートを完成させたりしたのであまり協力できなかったし、自分自身注意できなかったのも良くなかったと思う。

2.収集した情報が妥当なものであるか吟味する力

収集した情報については、まだもっと調べあげることができたと思います。私は個人レポートを書く際、大学で教授をされている方の論文から情報を得ましたが、その内容がとても納得のいくものだったのでそれ以上は情報収集を深めずにレポートに取り組んでしまいました。しかし、もっと細かく調べることができたと思います。また、論文を参考にしながらも、もっと自分の見解をはっきり示すべきだったと思います。次にまた文章を書く機会があれば、この反省を活かしてより良いレポートを書きたいです。

3,4を回答した生徒の理由（抜粋）

3.情報を再構成して自分の考えを深める力

情報収集があまいと感じる点があった。他の班と比べてみると、調べたことなどが少なかったように感じた。もっと発想をとばして軸になるような根拠を見つけるべきだった。

4.自分の考えを効果的に表現する力

グループでのテーマも自分は情報を探したりするだけでまとめることを任せてしまったり、個人レポートも自分で考えていることを文に表すことがあまり出来ず、イマイチなレポートになってしまったからです。もっとグループの場でも任せきりにせず自分の考えをまとめて表現していきたいです。

今回の単元では育成されなかったと回答しているものの、自らの課題に気付き、改善を図ろうとする意欲が見て取れる。

12.言語活動の充実をもとにした振り返り

『言語の役割を踏まえた言語活動の充実』

平成20年答申においては、思考力・判断力・表現力等を育むためには、例えば、次のような学習活動が重要であり、このような活動を各教科等において行うことが不可欠であるとしている。

a.知的活動（論理や思考）に関すること

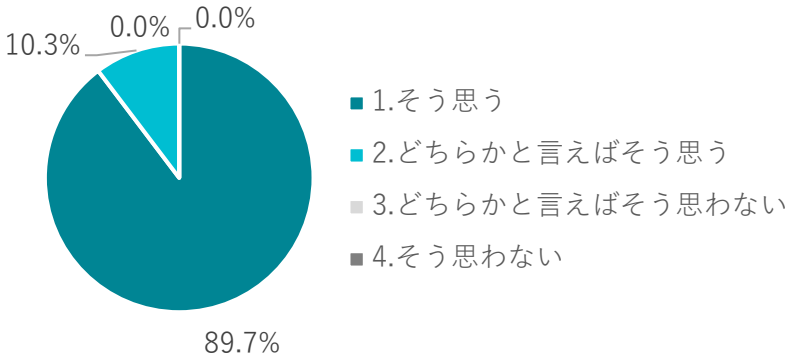
各教科等の指導において論理や思考といった知的活動を行う際、次のような言語活動を充実する。
○事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること
○事実等を解釈するとともに、自分の考えをもつこと、さらにそれを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

b.コミュニケーションや感性・情緒に関すること

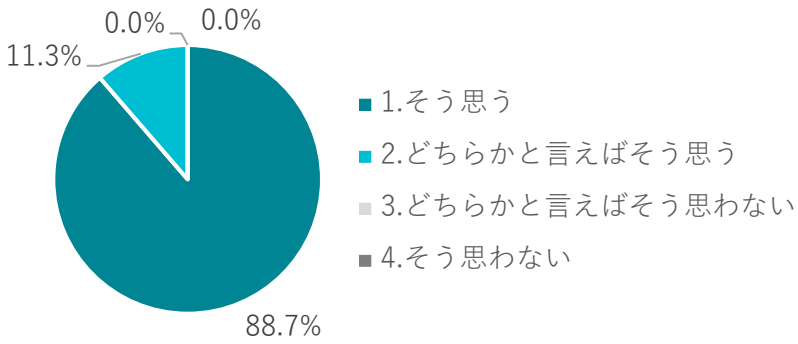
各教科等において、コミュニケーションに関する指導を行う際には、他者との対話を通して考えを明確にし、自己を表現し、他者を尊重し理解するなど互いの存在についての理解を深めるような言語活動を充実する。
各教科等において、感性や情緒に関する指導を行う際には、体験したことや事象との関わり、人間関係、所属する文化の中で感じたことなどを言葉にしたり、それらの言葉を互いに伝え合ったりするような言語活動を充実する。

12.言語活動の充実をもとにした振り返り

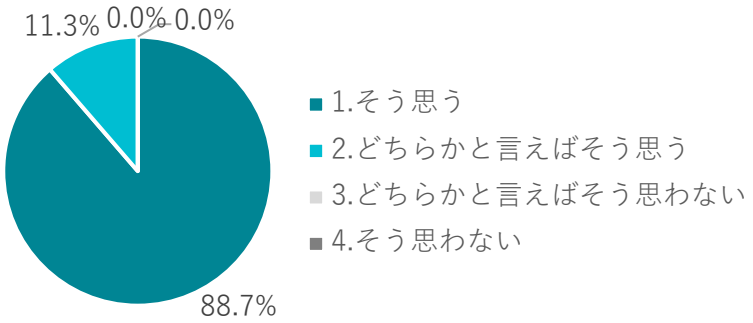
a1 本文や調べたことを正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝える授業



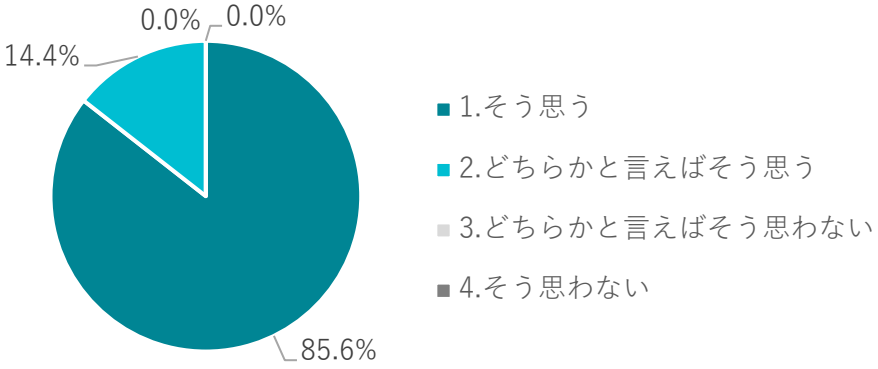
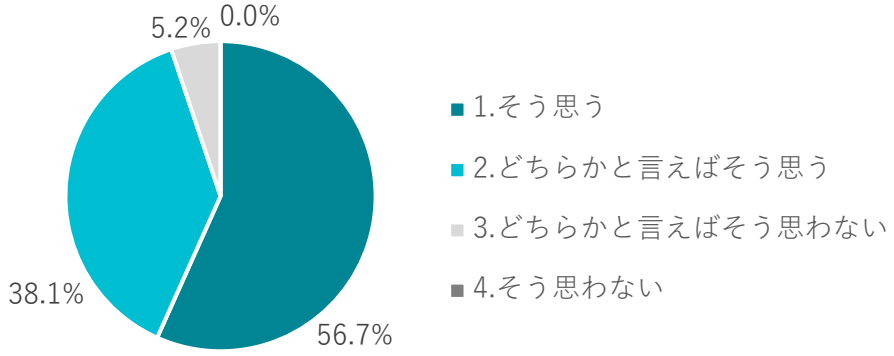
a2 本文を解釈し、自分の考えを持つ授業



a3 自分の考えを伝え合うことで、自分の考えや班の考えを発展させる授業



b1 他者との対話を通して考えを明確にし、自分の考えを表現したり、他者の考えを尊重して理解するなど、互いの存在についての理解を深める授業



b2 体験したことや日本文化・文学の中で感じたことなどを言葉にしたり、それらの言葉を互いに伝えあったりすることによって、感性や情緒が豊かになる授業